



BECHSTEIN KLAVIERSCHULE

ピアノ教育の現場から——

ベヒシュタインピアノの特性を活かしながら音楽をより深く理解するピアノ教育を実践している内藤晃先生と石本育子先生のお二人に、誌上特別レッスンとして今号より連載いただきます。音楽表現の可能性をいかに引き出していくのか、ぜひご注目ください。

弊社ベヒシュタイン・ジャパンの正規代理店 たかまつ楽器さん(高松市)では数年前から「青い鳥マスタークラス」が開講されています。このマスタークラスでは石本育子先生による授業と、定期的の特任講師内藤晃先生のレッスン・授業が行われています。このレッスンと授業の相乗効果を、受講生の子供達の魅力的な演奏を聴くことで確認することができました。旋律の抑揚からイメージできる人の会話や、その響きが造る感情の機微は、ピアノの技巧的な部分にフォーカスされた演奏からは決して感じられないものです。

その演奏を支えるのはピアノです。多くのピアノ楽曲が作られた時代のピアノの重要な特徴をどこかに置いてきてしまったピアノしか知らない状態で、果たしてその音楽を通して作者が放出したかった感情は理解され表現できるか?と考えると疑問が残ります。ベヒシュタインをはじめとするヨーロッパの一流と呼ばれるピアノは、ピアノ演奏芸術が開花した19世紀のピアノ製造が求めた楽器としてのピアノの本質を、常にその時代の要求に適合させながら継承しています。何が良いのか、何故良いのかは、求めるものがなければ理解できないものです。その、求める表現の可能性を引き出す授業とレッスンがこのマスタークラスでは行われ、その教育方針にふさわしいピアノとしてベヒシュタインが使用されています。

(加藤 正人)

隅々までを意識して弾くということ。



内藤 晃
(ピアニスト)



石本 育子
(たかまつ楽器ピアノ講師)



加藤 正人
(ベヒシュタイン・ジャパン代表)

内藤: 実は、ベヒシュタインって、弾き手の意識が行き届いていない部分をあぶり出しちゃう、こわいピアノなんですよ!

石本: そういう場面、レッスンでいつも見えています。本人が気づかない音楽的理解の度合い等全てお見通しな楽器。それをレッスン内で指摘すると、びっくりされ、そして急激に変わってくれます。

例えば、弾き手がメロディライン等『出したい音』として拘って打鍵した音達が、実は頑張り過ぎると耳にうるさい音として聴こえてくるんです。メロディラインって何でもかんでも出せばいいものではないのはある程度やってる人ならわかってくるけれど、ちょっと大きすぎるとか、ちょっと解放が遅いとか、を許してくれない楽器。それを最初は指導者が示唆するのですが、いつもベヒシュタインを弾いていると弾き手自身が気づくようになる。

内藤: アンバランスだったり抑揚がおかしかったりするの、そのまま音として出てきますよね。ピアノが助けてくれないんです。でも、隅々まで意識を行き届かせて弾くと、どこまでも微細なニュアンスで応えてくれる。アラが目立つというのは、実はすごく反応がいいということなんですよね。

加藤: そうですね。お感じになっているようにベヒシュタインはハンマーが打弦した瞬間の音の立ち上がり早いんです。これは、響きを拡張する音響部位全体の構造の特徴にあります。

また、整音という音を整える作業がありますが、小さな音での音色の変化も明確に出るポイントを探りながら行います。声のように多彩な抑揚をつけたいわけです。これはベヒシュタインの独特な倍音構成があるからこそ成せる技でしょう。

内藤: このような反応のいい楽器だと、出したい音色を探ってるうちに子どもたちの音へのアンテナが研ぎ澄まされていきますね。





内藤 晃
(ないとう あきら)

ピアニスト、指揮者、作編曲家。東京外国語大学ドイツ語専攻卒業。在学中よりピアニストとして演奏活動を始め、桐朋学園大学指揮教室、ヤルヴィ・アカデミー(エストニア)などで指揮の研鑽も積む。弾き振りを含む多彩な演奏活動とともに、「もっと深い音楽体験」を共有すべく、ユニークな発想でレクチャーや執筆を行う。月刊音楽現代に「名曲の向こう側」を連載、訳書にA.ゲレリヒ著「師としてのリスト」(近刊、音楽之友社)、校訂楽譜に「ジョン・アイアランド ピアノ曲集」「13人の女性によるピアノ小品集」(カワイ出版)などがあるほか、音楽雑誌やCDライナーノートの執筆も多い。札幌シンフォニエッタ、アピアント交響楽団、杉並グース合奏団などを指揮。2014年、全日本ピアノ指導者協会から新人指導者賞受賞。一次資料から作曲家の美意識を読み解く独自のレッススが各地で好評を得ている。CDに「Primavera」(レコード芸術特選盤)「言葉のない歌曲」(同準特選盤)などがあるほか、マリンバ吉川雅夫氏や作曲家春如セロリ氏のCDでピアノを務め、一流ソリストや作曲家からも厚い信頼を寄せられている。主宰ユニット「おんがくしつりオ」では教育楽器によるエキサイティングなアレンジが人気を博し、全国各地に招かれている。
www.akira-naito.com



石本 育子
(いしもと いくこ)

静岡県浜松市出身。信愛学園高等学校音楽科を経て武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科卒業。古屋豊、川内澄江の各氏に師事。東京・浜松・香川において数多くのコンサートに出演するだけでなく、自主企画の演奏会を立案運営。独自の指導法による連続講座をピアニスト内藤晃氏と共に汐留ベヒシュタインサロンにて開催。たかまつ楽器青い鳥音楽教室主事。青い鳥マスタークラス主任講師、四国二期会会員。全日本ジュニアクラシック音楽コンクール及び東京国際ピアノコンクール審査員。



加藤 正人
(かとう まさと)

ドイツピアノ製作マイスター称号を取得
現在ベヒシュタイン・ジャパン代表取締役社長

石本: 隔々までの意識、まさに最近の指導で核にしているところです。脳をフル回転させないといけないことでもありますが。だから、見学してるお母様がぎょんととされるのがあって(笑)生徒がたった一回弾くと疲れてへ口へ口になって私が「『よく頑張ったね、ブラボー』この曲終わり」みたいな。

内藤: そう、脳を使うんです!フレーズを歌うとき、その行き先を見据えて歌い出さないと自然な抑揚が作れない。和声に沿って音色をふっと翳らせたいとき、1-2拍前あたりからその行き先が意識できていないと、間に合わない。手がいま弾いているとこと、脳が感じているところは、時差が必要なんです!

石本: 時差、すごく重要だと思いますね。その時差の長さ?も次にどんな音楽があるかで変わってきますし、次の音楽をどう理解しているかも、その時差の取り方でわかってしまう。指導者にとってもわかりやすい有難い楽器です。

内藤: 無神経な弾き方をしてしまってもある程度いい音で返ってきちゃう楽器があるなかで、ベヒシュタインは、脳からの指令が間に合っていないときと間に合ったときで、音色が如実に変わりますね。

加藤: 先に説明した音の立ち上がりの速さと、もう一つ、響きに透明感があることも音色の変化を大きく感じる要素の一つでしょう。響きに透明感を出し、音域による響きの違いを作りやすくする独特な響板構造がベヒシュタインの特徴です。この構造部分をベヒシュタインでは、グランドピアノではメインリブ、アップライトピアノではレゾネーターと呼んでいます。これは、響板内の振動伝搬を区切る独特な響板工法で、他に例を見ない響きの体験を実現します。ダンパーのハーフペダルなどで音を持続させても全体的に響きがすっきりしていて全体の響きが濁りにくいこと、演奏の方法により、音域別に響きの感じを変えやすくなります。この響きの音域感は18世紀~19世紀当時のピアノが持つ特徴でもありました。ピアニストは全体の響きの中に旋律的な流れと和声的なバランス双方を意識しながら音楽を進めていくと思いますが、音の置き方をベヒシュタインははっきり見せてくれるはずです。

内藤: 音の置き方、おもしろい表現ですね。確かに、ベヒシュタインは、響きの奥行きの中なかでどのあたりか、音の位相・遠近感がわかりやすいです。ところで、石本先生が実践されてる、脳からの指令に必要な時差を子どもに体得してもらうためのアプローチについて教えていただけますか?

石本: 実は少し変わったソルフェージュ指導をしています。リズム課題で1小節のまとまりを幼児期から吸収すること、前の小節の最終拍で次の小節全体を思い描くこととそれを叩くことの準備ができる脳を育てます。いつ指令を出すか、もとても重要ですが、次の音楽をイメージできる力も同時に育てたいなと思っています。

内藤: そうですね!とりわけ大事だと思うのは、鍵盤上で音にしなくても楽譜を音楽として脳内再生できる能力、そして、音楽の全体像を描く能力です。

石本: はい。そういう意味で、マスタークラス授業でも構造の理解は重要度高いです。「森も木も」見えるように、です。

内藤先生、石本先生がお感じになっているベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、
実際どのように子どもたちに音楽を理解させていらっしゃるのか、
誌上レッスンと動画をリンクして公開いたします。



石本先生
レッスン動画

QRコード読み取りアプリでご覧ください。



石本先生



Yちゃん

耳で記憶する。

石本: さて今日はある曲を聴いてもらってそれがどんな曲なのか? 聴いて覚えて弾いてもらうことにします。

Yちゃん: え〜!

石本: 大丈夫、簡単だよ

〜演奏 (ツェルニー100番練習曲〜13番終盤)〜

Yちゃん: え〜! わからん!

石本: ただ聴いてるだけではつかめないよ。何を聴くか!? が大事。1つヒントね。3/8拍子です。じゃあそれを元に『何小節でできているか?』『どんな形でできているか?』を考えよう。それがわかれば覚えやすいよ。

石本: ~演奏~

さてどんなことがわかったかな? 何小節? 何調かな?

Yちゃん: 24小節! ドで終わるから... 八長調やと思う!

石本: さあ、もう弾けるかな? できるだけ少なく弾いて聴けるのがいいよ。どうしたら少ない回数で全部わかるか、考えよう!

~演奏~

さてじゃあどんな形式になっているのかな? 音楽の形が『ぶんぶんぶん』か『メリーさんの羊』か、はたまた『春が来た』か? どれだろう?

Yちゃん: え〜と『ぶんぶんぶん』みたい! でもはじめと終わりは少し違う!

石本: そうだね、何が違って何は同じなんだろう? そこ聴いてみよう。

~演奏2回~

Yちゃん: え〜と、メロディの音が多くなって... 多分... 左手は同じ?

石本: よく聴けました! メロディの音が多くなって聴けたかな?

Yちゃん: うん! あ、ちょっとわかったかも!? なんか〜同じようなこと言ってるから歌いやすい気がする。

石本: じゃあ、意外に覚えやすかった? 音のかたち、『音形』が同じなんだね。

Yちゃん: ~演奏~

石本: よかったよ!

Yちゃん: でも〜なんかちょっと... 左手が... 違ってないように聞こえたんだけど、使ってる音同じなんだけど〜なんかちょっと違う。気になるなあ。

石本: じゃあ、そこは次のレッスンで解説しよう!



内藤晃 先生 特別誌上レッスン①



内藤先生
レッスン動画

QRコード読み取りアプリでご覧ください。

楽節構造ってなあに？

内藤: Kくんは“文節”ってことは知ってる？

Kくん: 国語で習いました！文章を“ネ”で分けるやつですね。

内藤: そう！意味のまとまりで区切った単位のこと。

たとえば『ぼくは夕食後にピアノを練習します』って文だったら、
『ぼくは／夕食後に／ピアノを／練習します』ってなる。

僕は日本人だからふだん文節なんか意識しないけど、英語の文を読むときなんかは、少し長い文になると、文節みたいな意味のまとまりごとにスラッシュ引いてくと読みやすくなるよね。

Kくん: カッコでくくりましようとか、スラッシュ引きましようとか、先生に言われます！

内藤: 実は、音楽にも、文節みたいな意味のまとまりがあるんだ。楽節っていうんだけど。

Kくん: ガクセツ？

内藤: そう。それが曲のなかでどうなっているかを、楽節構造っていうんだ。だいたい4小節ずつ規則的に進行して、その小さなフレーズが8小節で大きなフレーズを形づくるんだけど、そうっていない曲もあって。さっきのベートーヴェンの展開部は、6小節になったり、3小節になったりして不規則で、迷子になりやすいから気をつけて！英語の文も、区切りを間違えると、意味が伝わらなくなっちゃうよね。

Kくん: ほんとだ！4小節ずつの進行じゃないと、なんか半端な感じがします。

内藤: そうそう！その“半端な感じ”を大事にして！

たとえば本来8小節でキリがいいはずのところかかってるとじらされるし、6小節で次行っちゃうとフライングっぽいよね。それって作曲家が狙ってることだから、まとまりはまとまりとして読んであげる感覚で弾くと、不整脈っぽい感じが出て面白くなるよ！

Kくん: …むずかしいですね！どうしても今弾いてるところに夢中になっちゃいます。

内藤: みんなそうなんだよね…。あらかじめ全体像を思い描いて、今のフレーズがどこまで行くか、その行き先まで見てみよう！そして、脳の中では、今弾いてるところよりも一歩先を感じながら身体をリードしていけるといいよね。

(続く)

イラスト: いう まりこ



内藤先生

Kくん



C. BECHSTEIN
JAPAN

株式会社ベヒシュタイン・ジャパン

〒157-0061 東京都世田谷区北烏山9-2-1

TEL:03-3305-1211 FAX:03-3305-9931

E-mail: info@bechstein.co.jp

HP: https://www.bechstein.co.jp/



発行人 加藤正人・営業企画室

EVENT REPORT ③

ドイツ・マンハイム国立音楽芸術大学総長

ルドルフ・マイスター教授 公開レッスン



講師：ルドルフ・マイスター

日時：2018年8月23日(木)、8月24日(金)

会場：赤坂ベヒシュタイン・サロン



ベヒシュタイン・ジャパン協賛のルドルフ・マイスター教授による小出郷ピアノ音楽合宿は20年以上の歴史を持ち、毎年8月に新潟県魚沼市小出郷文化会館で開催されています。この合宿と並んで夏の恒例行事となっているルドルフ・マイスター教授の公開レッスンが東京で開催され、今回はその様子を一部お伝えします。

まず、シューベルトの幻想曲ハ長調D760《さすらい人》。マイスター先生によれば、曲目のタイトルの「さすらい人」とはあてもなくさまよう人という意味もありますが、ここでは中世ヨーロッパにおいて若人が将来の仕事のために自分探しの旅をし、親方のもとへ修行しに行く、という様子を表現しているそうです。それを踏まえて冒頭の力強いテーマ【譜例1】をマイスター先生が弾き出すと、ファンファーレのようにピアノ全体が豊かに鳴り出し、今まさにさすらいの旅へ出かける若者を表すかのようにエネルギッシュで澁刺としたものになりました。また、転調していく様子は、次はどこへ向かうのか、はらはらしていたり、ホッとしたりなど、さすらい人の心情や旅の様子描写だそうで、まさに旅の場面が目の前に浮かんでくるような演奏でした。

【譜例1】シューベルト：〈さすらい人幻想曲〉 D760 冒頭



受講生の演奏もそれに触発されてか、ただff、アクセント、など演奏するだけでなく、音がだんだんと開放され表現が豊かになっていく様子がとても印象的でした。長大な曲ですが、マイスター先生は冒頭のテーマの部分について特にこだわりを持って繰り返し手本を示されたり曲の背景などについてお話しされたりしているうちに一時間があっという間に経ちました。

次に、バッハの平均律二巻第1番【譜例2】のレッスン。一通り演奏が終わった後、「曲のダイナミクス(強弱)については、楽譜には何も書かれていないけど、あなたはどう考えていますか。」とマイスター先生は受講生に問かけられ、答えに少し困った様子の受講生に「当時の楽器(チェンバロやオルガン)の音で演奏しているように弾くべきだという人もいますが、私はそうは思いません。現代のピアノで弾くなら全く別のものとして今のピアノの特性を生かした表現をすれば良いですよ。」と仰り、一例を弾いて下さいました。決して全てを同じ次元で弾くのではなく、様々な楽器でのpやfを想起させるようにコントラストをつけ、四声体の各声部が異なる音色でくつきりと浮かび上がって、複雑に入り組んだバッハの曲が立体的で生き生きとしていました。この時ふと、混じりけが少なく音域ごとに音色が異なるという特徴をもったベヒシュタインのピアノでバッハを弾くことの大きな意義を感じました。「自分が弾いたのはあくまでも一例であり、同じようにあなたが弾かなければいけないということは全くありません。あらゆる瞬間の響きを感じて自由に表現して良いのです。」とあくまでも奏者の意志であることを強調されました。

【譜例2】 バッハ：平均律第2巻 第1番 プレリュード 冒頭

最後に、ラフマニノフの練習曲Op.39-1【譜例3】では「多くの人が左手を強調しすぎるけれど、これはヴィルトウオジティーを見せる曲だから、大変だけれども右手の動きを単なるハーモニーとしてぼかして弾かずに、うねりをしっかりと表現しましょう。そうしないとラフマニノフらしさが出てきません。同時に左手の声部は、レガートでチェロのような音色で表現しましょう。右と左が同じ音色にならないように！」と指導され、受講生の演奏もより立体的になっていきました。

【譜例3】 ラフマニノフ：絵画的練習曲 作品39-1 冒頭

作品ごとに、各時代の様式を踏まえ、現代のピアノ、更に言えばベヒシュタインのピアノで表現できる可能性がとても生かされたレッスンで、非常に熱のこもった時間でした。冒頭で触れたマイスター教授による小出郷ピアノ音楽合宿は、2020年はコロナウイルスの影響で中止となりましたが、2021年8月17日～22日に開催予定です。詳細は追ってHP等ご案内をご確認ください。

(文責：前田)

【引用楽譜】

Petrucci Music Libraryより

・F.Schubert: Fantasie in C major, D.760

<https://imslp.simssa.ca/files/imglnks/usimg/e/ec/IMSLP02232-Schubert-Wanderer-Peters.pdf>

・J.S.Bach: Prelude and Fugue in C major, BWV870

https://imslp.simssa.ca/files/imglnks/usimg/5/59/IMSLP29930-PMLP05899-Prelude_and_Fugue_No.1_C_major_BWV_870.pdf

・Rachmaninoff: Etudes-tableaux, Op.39

<http://ks4.imslp.net/files/imglnks/usimg/f/f5/IMSLP39591-PMLP01894-Rachmaninoff-Etudes-Op39.pdf>